

E. M. Forster の “The Story of a Panic” に見る知性／自然*

松 林 和佳子

序

E. M. Forster の短編小説 “The Story of a Panic” は、彼が作家として初めて書いた物語である。¹ フォースターは1901年の6月にケンブリッジ大学を卒業した後、その年の秋から翌1902年の秋までほぼ1年間、イタリアを中心にヨーロッパを旅して過ごした。この作品をはじめ、フォースターの初期の短編小説の多くは、この旅の体験に基づくファンタジーが多いが、それらは彼の写実的な長編小説に比べるとあまり評価されていない。しかし、後の長編小説で掘り下げられるテーマの萌芽が見られるという点では注目され、その関連性が論じられてきた。²

彼の長編小説に共通する重要なテーマを1つ挙げるとすれば、それは様々な二項対立とその融和であると言えるだろう。最初の長編小説 *Where Angels Fear to Tread* (1905)、同じくイタリアを舞台にした小説 *A Room with a View* (1908) では、イタリア／イギリスの対比のもとに、イギリス国内の階級問題

* 本稿は、京都女子大学英文学会2014年度大会（2014年11月1日）での口頭発表の発表原稿を加筆・修正したものである。

1 フォースターは *Collected Short Stories* の Introduction 中で、「パニックの物語」は自分が初めて書いた物語だ (5) と述べている。

2 例えば Lionel Trilling は、“Forster’s short stories, indeed, are on the whole not successful, and their interest lies not so much in themselves as in their connection with the novels.” (Trilling 55) と述べている。

をも含んだ人間関係が描かれている。彼の作家としての地位を確立したとして多くの批評家に高く評価されている長編小説 *Howards End* (1910) では、文化や教養を重んずる知的階級 Schlegel 家と物質主義的な実業家 Wilcox 家という価値観の異なる両家の関係を中心に、社会に存在する様々な二項対立が扱われる。そしてフォースターの最高傑作と評されることが多い *A Passage to India* (1924) では、イギリス支配下のインドを舞台に、様々な登場人物の交流を通して両国の相互理解の可能性が追究されている。小説家として活動した約23年間、フォースターが作中で描いた二項対立は、異民族間の対比、価値観の相違、階級差の問題、そして大英帝国時代における帝国／植民地の関係など多岐にわたる。『ハワーズ・エンド』のエピグラフ “Only connect...” が示すように、絶えずその融和が求められてきた。それでは、なぜフォースターは2つの相反するものを結びつけることにこれほどこだわったのだろうか。そこには、どのような思いが込められているのだろうか。

『インドへの道』と *Maurice* (1971) の出版以降、フォースターの小説はポストコロニアル批評やフェミニズム批評・ジェンダー批評の観点から度々論じられるようになってきた。したがって、彼の短編小説においても、そこに潜んでいる支配者／被支配者、男性／女性、異性愛／同性愛などの二項対立に注目されることが多い。³ 時代とともに批評の関心が人種やジェンダーの問題へと移動し、これまであまり論じられることのなかった短編がそういった観点から再検討されることは大変興味深い。しかし本稿では、政治的・同性愛的側面のみに注目するのではなく、作家としての出発点となる作品「パニックの物語」の分

3 *Queer Forster* では、ユースタスの変身が、獣姦を含む多様な性的快楽の発見と関連付けられ、物語のパンは “the pan-sexuality” を示すとして、“it [“The Story of a Panic”] is a story of sexual awakening and the recognition of difference” (Martin 5) と述べられている。

また Wendy Moffat は、ケンブリッジ大学の友人たちが、「パニックの物語」をユースタスとパンさらに Gennaro の間で繰り広げられるみだらな同性愛の物語と解釈した事、またそのような解釈に対してフォースターが嫌悪感を抱いた事に言及し、この物語に関する “an unwitting gloss on Morgan’s own sexual panic” (Moffat 62-63) を指摘している。

析を通して、フォースターの描く二項対立のテーマ全体に共通する思想を探ってみたい。具体的には、物語の表題にもあるパンが象徴する＜自然＞の描写を手がかりに、そこに見出される人間と自然の関係を検討する。そして最終的には、フォースターの西洋文明社会に対するアンヴィヴァレントな見解を明らかにしたい。というのも、以後のフォースターの小説世界の根底に、その葛藤が常に存在しているように感じられるからだ。

1

この物語は、イタリアの Ravello という自然の美しい小さな村で起こるある不可解な出来事を描いたファンタジーである。ラヴェロの小さなホテルには、イギリスから来た旅行者が何人か滞在していた。物語の語り手「私」こと Tytler、彼の妻と2人の娘、元副牧師の Sandbach、芸術家の Leyland、Mary Robinson と Julia Robinson という未婚の姉妹、そして彼女達の甥で14歳くらいの少年 Eustace である。

ある5月の晴れた日に、彼らは近くの溪谷へピクニックに出かける。そこに広がる美しい風景を目にして、彼らは次のような反応を示す。

‘Oh, what a perfectly lovely place,’ said my daughter Rose. ‘What a picture it would make!’

‘Yes,’ said Mr Sandbach. ‘Many a famous European gallery would be proud to have a landscape a tithe as beautiful as this upon its walls.’

‘On the contrary,’ said Leyland, ‘it would make a very poor picture. Indeed, it is not paintable at all.’

‘And why is that?’ said Rose, with far more deference than he deserved.

‘Look, in the first place,’ he replied, ‘how intolerably straight against the sky is the line of the hill. It would need breaking up and diversifying. And where we are standing the whole thing is out of perspective. Besides, all the

colouring is monotonous and crude.’ (“The Story of a Panic,” 11) (以下、この作品からの引用は括弧内に頁数で示す。)

この場面には、人間が美しい自然風景を見た時に示す様々な反応が描き出されている。まずはローズが感嘆の言葉を発してその美しさを賞賛する。次にサンドバッチが加わり、美しい風景を「絵画」に描く話に発展する。するとレイランドが、絵にするためには遠近法や色調の点で問題があると言って、この景色に対する細かい不満を述べ始める。またローズはカメラを持参しており (11)、美しい風景を写真に写しとるという行為も仄めかされている。

芸術家気取りでうぬぼれの強いレイランドを嫌っている「私」は、自分は絵のことは分からないが、「美しいものを見ればそれが美しいと分かるし、それで十分満足だ」(11) と述べてこの会話を終わらせようとする。「私」の語りは、全体的に自分の価値観や偏見にとらわれた描写が多く、読者に深遠な教訓を与えてくれるようなタイプの語り手ではない。しかし、冒頭で自らを「平凡で単純な人間」であると言い、この手記についても「もったいぶって文学を気取るつもりはない」(9) と断っているように、彼の率直な発言は、時として物事の核心をついているように思われる。彼の語りが提示する彼らの会話からは、美しい自然風景を見た時、その美しさをただ楽しむということができず、その美しさを記録して残したいと考えたり、自分の芸術の知識を用いてあれこれと分析を加えたくなる人間の性質が見えてくる。

話題はさらに人間が自然に手を入れることの是非に移っていく。自分の利益のために木を切り倒す土地の所有者を批判し、「樹木が金に換算できるなんて考えるだけでもうんざりだ」(13) と述べるレイランドに対して、私は「金になるからといって自然の贈り物を軽蔑する」(13) 必要はないと皮肉る。美しい自然を愛でる心を持っていても、商業的な利益を得ることなしに人間は暮らしていけない。その点を見捨て自然の擁護を訴えるレイランドに対して「私」が述べる意見もまた、現世の真理を突いているように思われる。

この後程なくして、ピクニックを楽しんでいた一行は、突然不可解な恐怖に

襲われ、一目散に逃げ出す。具体的に何が起こったのか、結局真相は何だったのか、最後まではっきりと説明されることはないが、この恐怖体験は明らかに「牧神 Pan の登場」を示唆していると言えよう。上半身が人間、下半身がヤギの姿をしているギリシア神話の神パンは、葦で作った笛を携えて野山を駆け回り、ニンフと戯れたり木陰で昼寝をしたりする陽気な神だが、昼寝の邪魔をされたりした時には怒って動物の群れに「恐怖」すなわち「パニック」を送るといわれている。パンは牧人と家畜の神だが、彼が誕生した時、すべての神々が喜んだことから「パン」＝「すべて」という名前がつけられ、以後全自然を象徴する神ととらえられるようになった。やがてキリスト教の到来とともに、自然界から人間の精神が自立したとき、異教的世界の自然を象徴するパンは死んだと考えられるようになる。そのため近代では、牧神パンは自然の神であると同時に、キリスト教に対立する悪魔のイメージをも併せ持ち、文学のモチーフとしても度々登場するようになった。⁴ この物語では、大人たちの会話の中に見られる「森はもはやパンの隠れ家ではなくなってしまった」、「偉大なるパンの神は死んだ」(13) といった発言、少年ユースタスがピクニックの間に作る笛、また恐怖が過ぎ去った後に残されたヤギの足跡などが、読者にパンを連想させる仕組みになっている。

「私」はこの恐怖体験を次のように表現している。

I saw nothing and heard nothing and felt nothing, since all the channels of sense and reason were blocked. It was not the spiritual fear that one has known at other times, but brutal, overmastering, physical fear, stopping up the ears, and dropping clouds before the eyes, and filling the mouth with foul tastes. And it was no ordinary humiliation that survived; for I had been afraid, not as a man, but as a beast. (15)

4 この点については戸田氏 (13-30) を参照。

ここで注目したいのは、「耳が塞がれ、目の前は曇り」とあるように、人間の理性的な思考にとって重要な視覚・聴覚が突然奪われている点である。それに対して、感知することができたのは「口の中のいやな味」という動物的な感覚のみであり、それが彼らを得体の知れない恐怖に陥れている。その恐怖は、恐ろしい姿を見たり音を聞いたりすることによって「怖い」と思う「精神的な恐怖」ではなく、人間の言葉では説明できない理由から本能的に感じる「動物的」なものであり、「人間としてではなく動物として」体験した恐怖であったことが強調されている。

この「パニック」の場面で終了する第一部は、人間と自然の関係について、1つの示唆を与えてくれる。人間は、野山や森、川や海といった自然物に対して、その美しさを賞賛したり、その姿を守ろうとしたりする一方で、自分たちの都合によって手を加えることも辞さない。これらの行為は一見相反するように感じられるが、自然を生命のない無機物と捉え、優勢の位置から客観的に自然を見ているという点では共通している。しかしひとたび自然が動き出し、その強大な力を発揮すると、人間／自然の力関係はあっという間に逆転する。その力を目の当たりにした時、人間の知性は無力なものになり、大きな恐怖に圧倒される。そんな時、人間は自然にとっては自分たちは単なる小さな動物にすぎないことを思い知らされるのである。

2

それではこの作品は、自然に対する人間の無力さのみを訴えているのだろうか。第2部以降を検討していくと、決してそれだけではないことに気付かされる。自然についてのフォースターの見解をもう少し詳しく探るために、今度は物語の中で重要な役割を果たす少年ユースタスについて見ていきたい。

ユースタスは「私」と同じくイギリスからやって来た少年で、男の子が好きな「私」は、最初のうちユースタスをしきりに散歩や水泳に誘おうとする。しかし、ユースタスは全く興味を示さない。かといって、何か別のことに熱中す

る様子もなく、昼寝ばかりしているこの少年に「私」は「何とも言いようのない嫌悪感」(9)を抱き始める。つまり、外で活発に体を動かす事を好まず、勤勉でもなく、青白くて弱々しいユースタスは、「私」にとっては男の子らしくない少年であり、外見の面でも性格の面でも好きになれないのだ。

しかし、この弱々しい少年は、「パニック」の事件以降、奇妙な変容を見せる。「パニック」の瞬間、誰もがその不気味な恐怖感に捕らわれて逃げ出すが、ユースタスだけはいつもと変わらぬ様子であった。逃げ出した一同がユースタスがいないことに気付き、もとの場所に引き返すと、そこではユースタスが次のような様子でのんびりと横になっていた。

There, at the farther side, were the remains of our lunch, and close to them, lying motionless on his back, was Eustace. With some presence of mind I at once cried out: 'Hey, you young monkey! jump up!' But he made no reply, nor did he answer when his poor aunts spoke to him. And, to my unspeakable horror, I saw one of those green lizards dart out from under his shirt-cuff as we approached. (16)

ユースタスのじっと動かぬ姿、緑のトカゲが袖から這い出してくる様子は、1人の少年の姿というよりは、まるでその場の自然の一部になったような印象を与える。実際「私」はその様子に今まで彼に対して抱いていたような嫌悪感ではなく、「言いようのない恐怖」を感じている。

以後、ユースタスの挙動はますます周囲の人々を困惑させるものになっていった。帰り道、彼はいつになく元気で、インディアンや犬の真似をしながら森の中を駆け回り、突然野うさぎを腕に抱えてきたり、道で休んでいる老婦人の頬にキスをしたりして皆を仰天させる。このようなユースタスの奇行は、森で草木やニンフと戯れて過ごす牧神パンの姿と類似している。ユースタスが「ヤギのようにちょこちょこ歩く」(21)という表現も牧神パンを思わせ、彼の変容は「牧神パンへの変身」を暗示していると言えるだろう。得体の知れない

大きな恐怖にとらわれ、大人たちが陥った「パニック」は、ユースタスにとっては彼自身をパンと化す神秘的な力として働いたのだ。

さらにその夜、ユースタスは狭い寝室に居ることを嫌がり、「(寝室からは何も見えないんだ。花も、葉っぱも空も…。石の壁しか見えないんだ。)(25) と言って外へ抜け出して騒ぎ始める。その時の様子を「私」は次のように描写している。

There, pattering up and down the asphalt paths, was something white. I was too much alarmed to see clearly; and in the uncertain light of the stars the thing took all manner of curious shapes. Now it was a great dog, now an enormous white bat, now a mass of quickly travelling cloud. It would bounce like a ball, or take short flights like a bird, or glide slowly like a wraith. (24-25)

ここで注目したいのは、「私」がユースタスの姿を表現するときに使っている言葉である。最初に窓の外で動き回っているものを見つけたとき、彼はそれが何であるのか認識できず、「何か白いもの」「奇妙な形」といった曖昧な言葉で表現している。「私」の目に映るこの白い物体は、「大きな犬」や「巨大な白い蝙蝠」、「すばやく動き回る雲の一群」のようになり、「ボール」や「鳥」のように飛び回り、そしてさらには「幽霊」へと変化していく。この時のユースタスの姿は、彼が人間から徐々に動物や自然物、あるいは超自然的存在へと変貌しつつある様を示していると言えるだろう。

大人たちが必死に止めるのも聞かず、ユースタスは歌を歌い始める。その歌は、5本指の練習曲や音階に始まり、賛美歌、ワーグナーの一節を経て、最後には「山々を銃声のように吹き抜けるすさまじい叫び声」となって、ホテルに滞在していた人々全員を起こしてしまう(26)。ここでも、ユースタスの歌が人々に親しまれているメロディーから、人間には理解できない単なる「音」へと変化していく様子が窺える。

ユースタスが引き起こす騒ぎが大きくなることを懸念した「私」は、ユースタスが親しくしているイタリア人給仕のGennaroという少年を買収し、ユースタスをホテルの部屋に連れ戻すことに成功する。しかし、ジェンナロは大人たちの隙を見て、ユースタスを連れて窓から外へ飛び降りる。その後、ジェンナロは死んでしまうが、ユースタスは叫び声をあげて森の中へと消えていく。「ユースタスは理解されて救われた。死ぬのではなく、生きるんだ！」(33)というジェンナロのセリフが示すとおり、パンとなったユースタスは自然と一体になり、人間とは異なる新しい生を得たのだ。「私」の目に映るユースタスの最後の姿は「大きな白い蛾」のようであり、その叫び声は「もはや人間の声とは思えなかった」(33)と、はっきり書かれている。

小野寺健氏は、この物語の中に「単なる因習と化して精神に働きかける力を失ったキリスト教の拘束をのがれて、人間にひそむあらゆる可能性を解放したいという願望」(小野寺 66)が見られると指摘している。牧神パンとの出会いによって、自らもパンに変身し、自然の中に解放されるユースタスは、この願望の具現化とみなすことができるだろう。

それでは、解放されたユースタスは、理想的な姿として描かれているのだろうか。良くも悪くも社会の常識に縛られた普通の人間である「私」が語るユースタスの物語は、読者に自然界に解放される清々しさを感じさせるというよりは、一瞬背筋を寒くするような一抹の恐怖感を与えるように思われる。それはなぜだろうか。これまで見てきたように、彼は最後の解放の瞬間に向けて、徐々に人間らしさを失っていく。ユースタスがパンになったという出来事そのものより、彼がパンへと変容していくその過程、つまり、人間が人間ではないものになっていく様子が、奇妙な違和感を与え、恐怖感を抱かせるのではないだろうか。

また、パンへの変身を遂げたユースタス自身に関しても、幸福なイメージを与えるとは言い難い。森の中へ解放された時、彼は歓喜の叫びをあげて駆け出していくが、その時には15年間で初めてできた友人ジェンナロを失っている。つまりユースタスは、自然と共存できるパンとなるが、その一方で人間として

の生活は放棄しなければならないのだ。大人たちが外で騒いでいるユースタスをホテルに連れ戻そうとする時、ジェンナロが、過去にユースタスと同じような状態になったCaterinaという少女の話をする。彼女は、大人たちに部屋へ閉じ込められたことによって死んでしまったという(32)。パンになるということは、人間の生活環境の中ではもう生きられないということなのだ。

ユースタスの奇妙な変容について、「わかっているけど、説明できない」(31)と述べるジェンナロは、Herzの言葉を借りれば「パンの世界の証人」(ヘルツ30)である。しかしこの証人は、パンの世界を感知できる唯一の人間でありながら、金銭の誘惑に負けて一度はユースタスを裏切ってしまうという点で、いかにも人間らしい部分を持っている。最終的にはユースタスの解放に手を貸すが、パンの世界と人間界の境界線で揺れ動くジェンナロ自身は、命を落としてしまう。この少年の死も、2つの世界での生が両立不可能であることを示す一例となっているように思われる。

「私」が語るユースタスの物語は次のような一節で幕を閉じる。

The morning was still far off, but the morning breeze had begun, and more rose leaves fell on us as we carried him [Gennaro] in. Signora Scafetti burst into screams at the sight of the dead body, and, far down the valley towards the sea, there still resounded the shouts and the laughter of the escaping boy.
(33)

ユースタスの最後の姿を見て「救われた」と叫ぶジェンナロとは違い、「私」の表現からは、喜ばしい雰囲気はあまり伝わってこない。ジェンナロの死体を見て悲鳴をあげる女主人、そこに降りかかるバラの葉、遠くから響いてくるユースタスの笑い声という言葉で構成されるこの場面は、舞台上の悲劇の一場面のようにあり、「私」との間に大きな距離感が感じられる。つまり、「私」はこの出来事を自分の住む現実世界の出来事として身体で感じていないのだ。「私」はユースタスの身に起こった事実を言葉で語ることはできても、パンの世界との

出会いによってユースタスが得た歓喜を身体的感覚で感知することはできない。むしろ、言葉で表現できない未知の世界を前にすると、恐怖を抱き、拒絶反応を示して突き放してしまう。ここに普通の人間である語り手の限界が明らかにされていると言えるだろう。貧しい漁師の息子であるイタリアの少年ジェナロは、教養あるイギリス人の大人たちとは違って、パンの世界を恐れることなく理解できる。⁵しかし一方で彼はそれを言葉で語ることはできないという点も興味深い。物事を知性で解釈することと身体で感じること、この2つを結びつけるのは大変な難業なのだ。

結び

19世紀から20世紀への転換期の中で、フォースターがキリスト教的な世界や知性に偏った西洋の文明社会に疑問を抱き、それに対立する自然の世界を尊重しようとする見解を持っていたことは、すでに批評家たちによって指摘されている。⁶彼のこの見解は「パニックの物語」にも人間／自然の対立的関係とその越境という形で現れているが、人間の世界と自然の世界のどちらに重きが置かれているのかを判断するのは難しい。なぜなら、境界を越えて自然との一体化に成功したユースタスは、必ずしも肯定的な存在として描かれているとは言え

5 ヘルツは、「パニックの物語」をはじめ、フォースターの短編小説によく登場する語り手を、“dull and uncomprehending, unaware of the story that is really happening on the other side of their narration” (Herz 30-31) とし、物事の真実をより鋭く見抜くことができるジェナロと区別している。

6 小野寺氏は、エドワード朝文学の特徴のひとつとして、ヴィクトリア朝のキリスト教の束縛に対する反発と自然礼賛を挙げ、「パニックの物語」にも「自然の重要性」というテーマが見られることを指摘している。(小野寺322-324)

またトリリングは、西洋的知性の伝統を“the Western tradition of intellect which believes that by making decisions, by choosing precisely, by evaluating correctly it can solve all difficulties” と定義し、“Perhaps no one in our time has expressed so simply as Forster the weariness with the intellectual tradition of Europe which has been in some corner of the European psyche since early in the 19th century.” (Trilling 173-174) と述べている。

ないからだ。自然を知性で観察し、所有し、支配しようとする人間、それに對して人間の知性では計り知れない力を持つ自然、その関係において人間に勝ち目はない。しかし、だからといって、この物語が異教的世界の時代に遡り、自然界に戻って自然と共存することが至上の幸福だと主張しているようには思えない。

フォースターはずっと後の1946年に「現代の課題」と題する評論のなかで、「人間を根源的な闇からひきだし、獣と区別する活動」として「芸術」を挙げている。彼は、芸術は「混乱しているこの惑星のまんなか、自立した調和を持ったささやかな世界を創る点」で価値があると述べ、「この活動は現代の闇の中でも続けていかななくてはならない」と主張している（“The Challenge of Our Time,” 57-58）。フォースターが知性を過度に重視する文明に懐疑的であったことは明らかであるが、彼のこの意見からは、知性を全面的に否定していたわけではないことが窺える。人間が人間として生きていくために、たとえ自然界には遠く及ばなくとも、人間独自の世界を創ろうとする努力が必要である。そしてそれを可能にするのは知性をもって他にない。そういった意味において、

7 例えば、*Where Angels Fear to Tread* では、Monteriano というイタリアの町の美しい眺めを背景に、イギリス人女性 Lilia はイタリア人の Gino と恋に落ちる。この場所を訪れることで、2人の若いイギリス人 Caroline Abbott と Philip Herriton も精神的な成長を遂げ、中産階級的な束縛を逃れ、人生に対して新しい見方をするようになる。また *A Room with a View* では、イギリス人女性 Lucy Honeychurch が、旅先の Florence で George Emerson（イギリスの青年だが、ルーシーとは階級が違う）と出会ったことをきっかけに、因習的な価値観を打破し、自らの正直な感情を直視する力を身につけていく。*A Passage to India* では、イギリス人女性 Mrs Moore と Adela Quested が、Marabar 洞窟の中で、言葉では表現できないような恐怖体験をし、人格が変わってしまうほどの衝撃を受ける。こういった旅先での体験が彼らの人生にもたらす変化は良い点ばかりではない。『天使も踏むを恐れるところ』に描かれるリリアとジーンの結婚生活は決して幸せなものではないし、またキャロラインはジーンに、フィリップはキャロラインにそれぞれ叶わぬ恋をするようになる。『眺めのいい部屋』の場合は、ルーシーとジョージの結婚の成就というハッピーエンドで物語が終わるが、50年後の1958年に書かれた後日談では、彼らが様々な現実問題に直面する様子が描かれる。また『インドへの道』では、ミセス・ムアは無気力なまま、イギリスへの帰国途中に他界してしまい、アデラはインドでの出来事に疲れ果ててイギリスに帰ることになる。

フォースターは知性にも大きな価値を見出していたのではないと思われるのだ。

フォースターの小説では、初期のファンタジーだけでなく、以後の写実的な長編小説においても、イタリアの美しい風景やインドの洞窟など、異国の自然物がイギリス人の理性を揺るがせ、彼らの人生観を変えるシーンが度々見られる。しかしそれらの衝撃的な体験は、彼らの精神を成長させるが、必ずしもその人生を幸福に導くわけではない。その後の人生をどのように生きるのか、新たな苦悩に陥る登場人物も少なからず存在する。⁷ 社会的あるいは道徳的な束縛から解放され、自らの感情や欲望を直視することは、素晴らしい目覚めの体験であると同時に、今まで信じてきた価値観が崩壊する恐怖の体験でもあると言えるだろう。フォースターは、人間の理性や知性を超える世界に憧れると同時に、知性の通用しない世界に踏み出すことへの危険性にも気付いていたように思われる。後の長編で異文化や同性愛といった問題を扱う上でも、未知の世界に対する憧れと恐れという葛藤を抱きながら、新しい人間関係の可能性を深く且つ慎重に追求していったのではないだろうか。

フォースター自身の言葉によると、ケンブリッジ大学卒業後の旅行中、1902年の5月に訪れたイタリアのラヴェロで、溪谷に座っていた時に「パニックの物語」の構想が突然ひらめいたという。⁸ 23歳の若きフォースターが、旅先の美しい風景にインスピレーションを得て一気に書きあげた物語が、知性／自然に対する葛藤をすでに感じさせることは興味深い。単に初めて書かれた物語というだけでなく、生涯探究されることになるテーマの出現という意味でも、この物語は作家フォースターの第一歩となる作品だったと言えるだろう。

8 *Collected Short Stories* の Introduction で、フォースターは「パニックの物語」について、“I think it was in the May of 1902 that I took a walk near Ravello. I sat down in a valley, a few miles above the town, and suddenly the first chapter of the story rushed into my mind as if it had waited for me there (5).” と述べている。

Works Cited

- Forster, E. M. “The Story of a Panic.” (1904) in *Collected Short Stories*. London: Penguin, 2002. 9-33.
- . “Introduction.” (1947) in *Collected Short Stories*. London: Penguin, 2002. 5-7.
- . “The Challenge of Our Time.” in *Two Cheers for Democracy*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Edward Arnold (Abinger Edition), 1972. 54-58.
- Herz, Judith Scherer. *The Short Narratives of E. M. Forster*. London: The Macmillan Press, 1998.
- Martin, Robert K., and George Piggford, eds. *Queer Forster*. Chicago : The University of Chicago Press, 1997
- Moffat, Wendy. *E. M. Forster: A New Life*. London: Bloomsbury Publishing Plc, 2011.
- Trilling, Lionel. *E. M. Forster*. Norfolk, Conn.: New Directions, 1943.
- 小野寺健『E. M. フォースターの姿勢』みすず書房 2001.
- 戸田仁『牧神パーンの物語-Two Tales of ‘Pan-motif’-』旺史社 1988.

翻 訳

- E. M. フォースター「現代の課題」『フォースター評論集』小野寺健訳、岩波書店 1996.
- ライオネル・トリリング『E. M. フォースター』中野康司訳、みすず書房 1997.